

国道バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成12年度

2001.3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
国 土 交 通 省 四 国 地 方 整 備 局

例 言

1. 本書は、国道バイパス建設に伴い、平成12年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要を記録したものである。本年度は、住吉（すみよし）遺跡・羽間（はざま）遺跡・室塚（むろづか）遺跡の発掘調査と、綾歌バイパス渡池住吉地区の予備調査、善通寺バイパス西原地区の予備調査、及び鴨部・川田（かべ・かわた）遺跡の整理作業を実施した。

2. 本事業は、国土交通省四国地方整備局から委託を受け、調査主体 香川県教育委員会、調査担当財団法人 香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3. 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センターの、本事業に関する調査体制は以下のとおりである。

総括	所 長	小原克己（平成12年11月1日から） 菅原良弘（平成12年10月31日まで）
	次 長	川原裕章
総務	副 主 幹	六車正憲
	副 主 幹	大西誠治
	係 長	新 一 郎
	主 査	山本和代
	主任主事	高木康晴
調査	参 事	長尾重盛
	主任文化財専門員	藤好史郎
	文化財専門員	森下友子
	文化財専門員	山下平重
	主任技師	信里芳紀
	技 師	松岡 晶
	調査技術員	中村文枝
	調査技術員	秋山 亮

4. 調査にあたっては、次の機関の御協力と各位の御教示を得た。記して感謝したい。

綾歌町教育委員会、綾歌町建設課、渡池水利組合、満濃町建設課、満濃町教育委員会、羽間大池水利組合、羽間自治会、西原自治会、室塚自治会。

5. 本書の執筆は、藤好・森下・山下・信里が行い、信里が編集した。

6. 挿図の一部に、国土地理院発行地形図（1/25,000善通寺・滝宮）を使用した。

本文目次

I. 平成12年度調査の概要（藤好）	(1)
II. 国道バイパス建設に伴う発掘調査	
1. 予備調査（信里）	(2)
2. 住吉遺跡（信里）	(5)
3. 羽間遺跡（信里）	(7)
4. 室塚遺跡（山下）	(13)
III. 整理事業の概要報告	
1. 鴨部・川田遺跡（森下）	(16)

挿図目次

図1 渡池住吉地区 調査地位置	(2)
図2 渡池住吉地区トレンチ配置	(3)
図3 西原地区 調査地位置	(3)
図4 西原地区トレンチ配置	(4)
図5 住吉遺跡I・II区平面	(6)
図6 羽間遺跡周辺の地形	(7)
図7 羽間遺跡 遺構配置	(9)
図8 大型掘立柱建物1 平・断面	(11)
図9 室塚遺跡位置	(13)
図10 室塚遺跡調査区位置	(14)
図11 出土土器	(15)
図12 A区遺構配置図	(15)

写真目次

写真1 17トレンチ遺構検出状況（南から）	(2)
写真2 27トレンチ渡池の堆積土（西から）	(2)
写真3 4トレンチ溝検出状況（西から）	(3)
写真4 8トレンチ遺構検出状況（南から）	(3)
写真5 I区遺構検出状況（東から）	(5)
写真6 II区焼成施設検出状況（南から）	(5)
写真7 II区北壁断面（東から）	(8)
写真8 I区全景（北から）	(8)
写真9 竪穴住居1検出状況（南から）	(8)
写真10 大型掘立柱建物1検出状況（南から）	(10)
写真11 大型掘立柱建物1検出状況（西から）	(10)
写真12 大型掘立柱建物1と竪穴住居2（南から）	(10)
写真13 柱穴6断面（東から）	(10)
写真14 A区全景（西から）	(14)
写真15 横穴式石室全景（南から）	(14)
写真16 鴨部・川田遺跡出土石斧	(15)
写真17 鴨部・川田遺跡出土石庖丁	(15)

I. 平成12年度事業の概要

平成12年度の国土交通省施工国道関係の埋蔵文化財調査事業は、発掘調査業務と整理業務からなる。発掘調査業務では、一般国道32号満濃バイパス建設に伴う羽間遺跡・室塚遺跡の発掘調査と同綾歌バイパス建設に係る渡池・住吉地区の予備調査を実施した。一般国道319号善通寺バイパス建設関係では西原地区の予備調査を実施している。整理業務では、一般国道11号高松東道路建設に伴う志度町鴨部・川田遺跡の整理作業を実施している。同遺跡は平成2・3年度に発掘調査を、平成7年度から10年度に整理作業を実施し、既に『鴨部・川田遺跡Ⅰ・Ⅱ』として2冊の報告書を刊行している。また、今年度整理作業実施分については来年度に報告書を刊行し、同遺跡に関するすべての整理作業を完了する予定である。

羽間遺跡は、丸亀平野南部の中津山西麓に位置する。昨年度の予備調査によって絞り込まれた3,749㎡の発掘調査を実施した。主に弥生時代後期から中世に至るまでの遺構・遺物を確認し、中でも弥生時代後期の大型掘立柱建物が注目される。この大型掘立柱建物は、梁間2間・桁行3間(5.5×9.1m)の柱構造をもち、床面積は50㎡と県内における弥生時代の掘立柱建物の中でも最大である。また、土間敷きではなく床構造をもつことと、周辺でほぼ同時代の堅穴住居を2棟検出しており、これらとの位置関係から集落内の共同倉庫として機能を推定される。今後その出現の経緯や流入ルートを検討することにより同時代の地域間交流を伺い知ることができる資料である。

室塚遺跡は、綾歌町域の南西端に位置する西山の東側丘陵部分とそれによって挟まれた谷部分に位置する遺跡である。これら丘陵部分と谷部分合わせて2,056㎡の発掘調査を実施した。丘陵部では、弥生時代後期前半代の墓地と古墳時代終末期の埋没古墳1基を確認している。弥生時代後期の墓地は10基の土壇墓から構成され、土壇底面に木棺の小口板の痕跡が確認できるものが7基含まれる。これら土壇墓の主軸方位は、丘陵の尾根線に平行するものと直交するものの二者が存在し、同時代の墓地構成原理を考える際の良好な資料になるだろう。古墳は、丘陵の南側斜面部において横穴式石室礫床と平面形が「コ」の字を呈する周溝を確認した。この周溝から11m程の規模が復元されるが、削平行為が著しく平面形態については今後検討を要する。石室内からは須恵器片や鉄釘が出土した。

一般国道32号綾歌バイパス建設関係では、渡池住吉地区の予備調査を実施した。全体的に比較的近年の道路建設や宅地・畑地造成による削平行為が著しかったものの、一部で中世後半代の小規模な集落を検出したことから、調査区を拡張し住吉遺跡と命名した。また、今年度は用地取得未了部分があり、来年度以降継続して予備調査を実施する予定である。

一般国道319号善通寺バイパス建設関係では、西原地区の予備調査を実施した。また、調査地は昭和63年度に発掘調査を実施した京免遺跡に南接するものである。調査の結果、微高地を中心として弥生時代から中世に至るまでの溝を中心とした遺構を検出し、後者には周辺に現存する条里型地割に合致するものも含まれる。

整理作業を実施した鴨部・川田遺跡は弥生時代前期前半から中期初頭にかけての環濠集落である。今年度は、主としてこの環濠出土土器と豊富な磨製・打製石器類の遺物を対象として整理作業を実施した。

II. 国道バイパス建設に伴う発掘調査

1. 予備調査

(1) 国道32号綾歌バイパス 渡池・住吉地区

調査対象地は、綾歌町西部の馬指川東岸部分から、綾南町との町境である旧渡池東堤防部分までの現道拡幅部分である。今年度は用地取得が完了した同丘陵斜面部を中心として合計28本のトレンチを設定した。巨視的に見ると、対象地の地形は1トレンチの平坦地・1～23トレンチの丘陵尾根部乃至谷地形部分・24～27トレンチの平坦地部分に区分される。

調査の結果、1トレンチでは馬指川の旧氾濫原面を確認した。2～23トレンチ間では、17・18トレンチで中世後半の柱穴群を中心として遺構が確認されたものの、比較的近年の削平行為が著しく広がりを見せるものではなく、谷地形部分においても包蔵される遺物量は希薄であった。24～27トレンチ間の平坦部では、旧渡池に伴う堆積層を確認した。この内、遺構が多く確認された13・17・18トレンチが所在する尾根部分を中心として、住吉遺跡と命名し調査区を拡張した。(II-2参照)

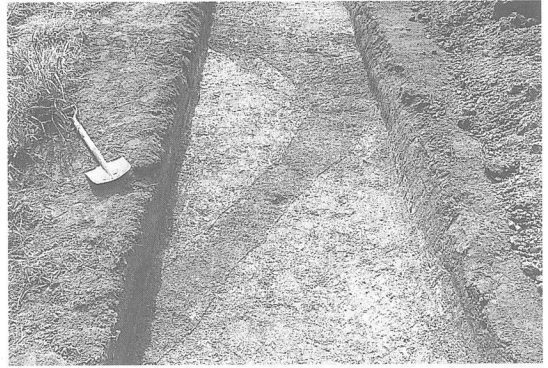


写真1 18トレンチ遺構検出状況



写真2 27トレンチ渡池の堆積土

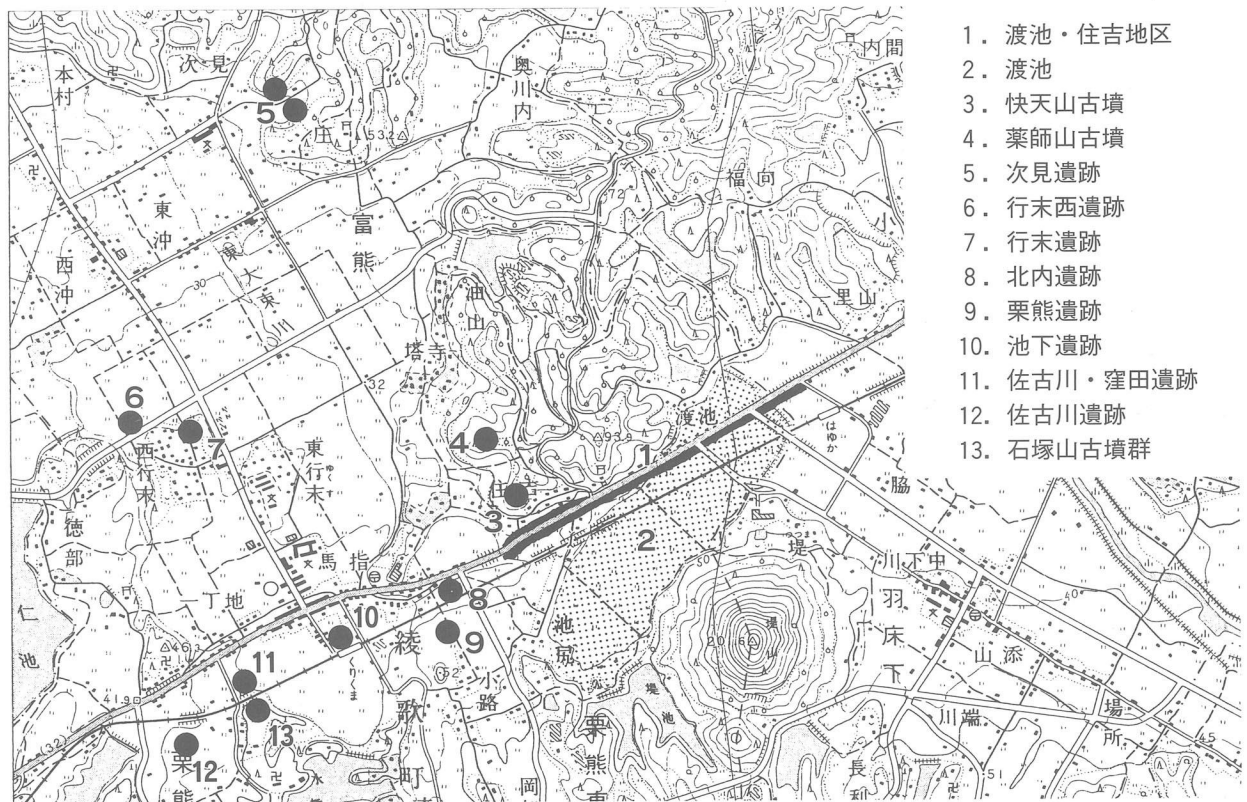


図1 渡池・住吉地区調査地位置 (1/25,000)

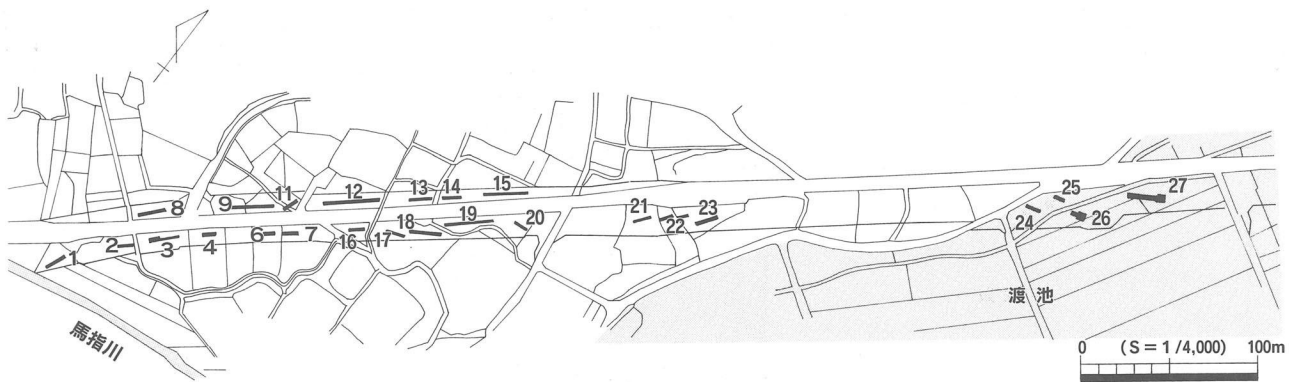
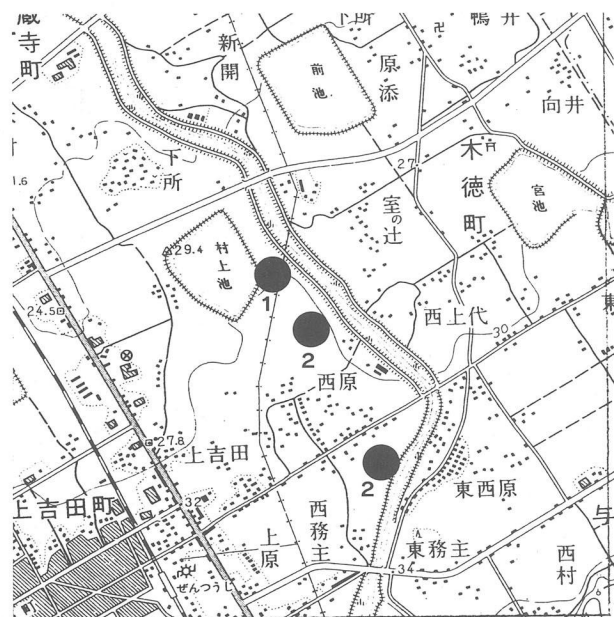


図2 渡池・住吉地区トレンチ配置図

(2). 国道319号善通寺バイパス 西原地区

調査対象地は、善通寺市北東部の現金倉川やこれから派生した旧河道によって画された微高地上と、同河川の氾濫原と想定される平坦地からなる。また、昭和63年度に発掘調査を実施した京免遺跡に南接するものである。用地取得が完了したこの微高地上を中心に合計14本のトレンチを設定し、地下遺構の状況を確認した。

調査の結果、1～11トレンチの微高地上において、埋没土や、出土遺物から想定される古代以前の溝を中心とした遺構と、中世後半以降の条里型地割に伴う溝を多く確認した。12～14トレンチ間では、現状の地割の乱れなどから想定した通り、現金倉川の氾濫面を確認した。



1. 京免遺跡 2. 西原地区

図3 調査地位置 (1/25,000)



写真3 4トレンチ溝検出状況 西から



写真4 8トレンチ遺構検出状況 南から



図4 西原地区トレンチ配置図

2. 住吉遺跡

(1) 遺跡の位置

住吉遺跡は、綾歌町と綾南町に跨る横山の南へ延びる標高44m前後の丘陵先端部に位置する。また、近接する同一丘陵上には、全長約110mの前方後円墳である快天山古墳が所在する。

既往の調査例から、遺跡周辺は弥生時代以降に幾度かの革期によって区分される開発行為を受けながら現在に至ることが判明している。西方の矮小な谷底平野に位置する北内遺跡・池下遺跡では、弥生時代前期後半以降に灌漑水路が掘開され始め古墳時代まで続く。古代末から中世前半には、丸亀平野の条里型地割が施工され、面的な水田開発と、集落域としての積極的な土地利用が始まる。問題はこの住吉遺跡などの丘陵上や、西方の岡田台地などの開発行為がどこまで遡るか追求することであろう。

また、遺跡南方には、現馬指川（綾川旧流路）を利用し造られた渡池が所在するが、今のところその時期は明確ではない。近世初頭の嘉永年間の絵図にはその存在が確認でき、上限については現馬指川（旧綾川）の氾濫原面部分の予備調査成果等から中世後半から末にかけての時期が想定されるが、今後の調査例の蓄積を待つべきであろう。

(2) 検出された遺構・遺物の概要

予備調査の結果、柱穴を中心として比較的遺構が密集して検出した17. 18トレンチの地筆をⅠ区、19トレンチの地筆をⅡ区として調査区を拡張した。Ⅰ区では、掘立柱建物3棟以上・溝4条を検出し、Ⅱ区では柱穴数基に加えて性格不明の焼成施設を1基検出した。図5はそのⅠ・Ⅱ区の平面図である。

Ⅰ区では合計100基程の柱穴を検出した。埋没土は黒褐色粘質土を基調とし、数基の柱穴から、中世後半（14末～15c初頭）頃の土師質土器の出土を見た。この埋没土の特徴が共通することと、出土遺物から同時期の遺構群と見て過誤無かろう。掘立柱建物は3棟復元し、いずれのものもほぼ真北方向かそれに直交する方位を指向する。近接する北内遺跡や池下遺跡などの、平地部に所在する中世前半～後半にかけての建物群が、丸亀平野の条里型地割の方向にほぼ合致することが一般的であることと比較すると、異質な建物群と言えよう。また、数カ所程認められる柱穴列や調査区東端付近に位置する溝2の平面プランなどから、建物数は更に数棟程度増加するものと見ておきたい。

Ⅱ区では、性格不明の焼成施設1基と溝2条、土坑・柱穴数基を確認した。この内、焼成施設としたSX01は幅約1.2～1.5m、全長約7m以上、深さ約0.3mを測る。埋没土の大半は炭化物層で占められ、底面及び壁面の立ち上がりに赤色化した熱変を認めるがそれほど顕著なものではない。



写真5 Ⅰ区 遺構検出状況 東から



写真6 Ⅱ区 焼成施設1 検出状況 南から

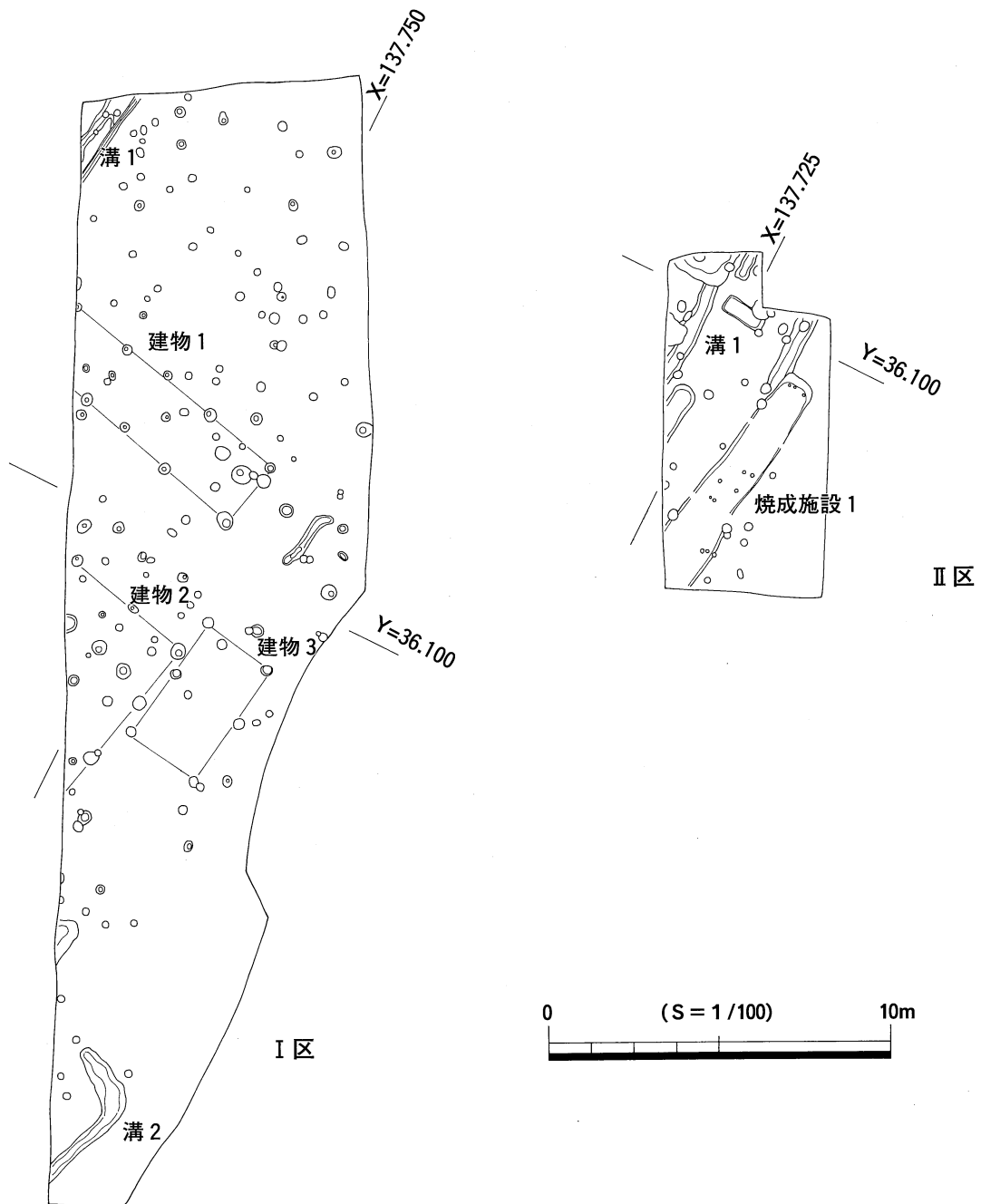


図5 住吉遺跡 I・II区平面図

出土遺物は見られないが、I区の掘立柱建物や溝と同一方位を示すことから概ね同時期の所産と推定できるが、焼成された遺物を特定できない。

(3) まとめ

検出された遺構はほとんどのものが中世後半に比定されるものが殆どであったが、掘立柱建物や溝等の方位は真北を指向する。また、遺跡周辺における既往の調査において確認されている北内遺跡や池下遺跡などの条里型地割溝の方位とは異なる。これは、丘陵上という地形に制約された局所的な同時代地割の状況を示すことも考えられるが、この方位が遺跡南方の渡池の堤帯のラインや現馬指川の流下方向と合致する点などを考慮すると、遺跡周辺の土地開発と連動したものであることも想定されよう。今後は、渡池の築造時期とも絡めてこの地域の土地開発史の中でこの点について補強していく作業が必要であろう。

3. 羽間遺跡

(1) 遺跡の位置

羽間遺跡は、丸亀平野南部に位置する中津山の丘陵先端部付近の緩斜面地に立地する。遺跡西側には、同平野の主要河川である土器川がやや東へ振れながら北へ流下し、眼下には、善通寺市域や琴平町域の高篠地区や四条地区など同平野南部が広がる。また、土器川を挟んで西側には、条里型地割が明瞭な形で見られるが、これらに交錯するように土器川から派生した北西方向の旧河道が幾条も見られる。羽間遺跡が所在する西側には、条里型地割は認められず同河川の旧河道によって造り出された凹凸が明瞭に観察されることから、氾濫原面と考えられる。羽間遺跡は、中津山とこの氾濫原面との変換点付近に付着した矮小な段丘面上に立地する。調査の結果弥生時代遺構面下より散漫な縄文後期土器の出土を確認した。これは、この段丘面の形成時期の一端を示す一材料になると思われる。

羽間遺跡の所在する丸亀平野南部地域の弥生集落の様相は未だ明らかになっていない。集落では、遺跡南方に所在する町代2号墳下層の中期末から後期初頭かけての倉庫と目される掘立柱建物（1間×3間 2.5×5.5m）や、遺跡対岸の吉野下秀石遺跡の後期初頭の竪穴住居2例などがある。しかし、地域内での集落の動態や、十分な集落構成要素を検討する材料は得られていない。

また、羽間遺跡周辺からは青銅祭器類がやや集中して確認されている。満濃町吉野神社では銅鐸片（扁平紐式？）が出土し、本遺跡の南西の中津山丘陵からは平形銅剣2口の出土が伝えられる。しかし、集落の実態が不明なことと合わせて、これら青銅祭器類を使用してマツリを行った集団の動向については、未だ不明確である。

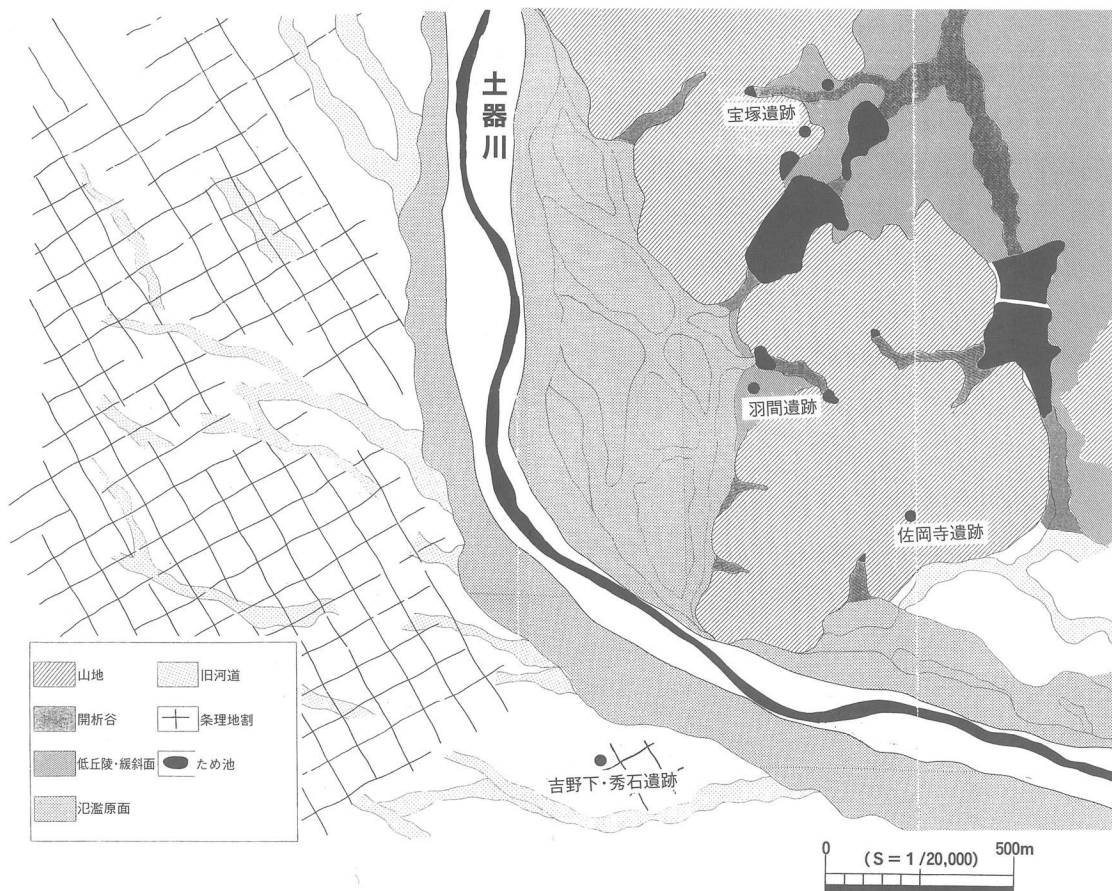


図6 遺跡周辺の地形

(2) 検出された遺構・遺物

a. 土層序 調査前は、丘陵斜面地を小規模な単位に分割した水田乃至畑地であった。調査区内の地表面は、東の丘陵頂部側から西側の先端部付近に向かって傾斜し、約3m程の比高差を測る。

また、調査区付近は中津山西麓の丘陵斜面地の中でも最も比高差が少ないことと、調査区北・南側には小規模な開析谷が所在することから、一つの完結した地形単位となっている。地表面から0.3m程の現耕作土と床土が見られ、黄灰色粘質土を基調とした弥生時代の遺構面に到達し、間層には遺物包含層を交えない。遺構面は元来斜面地であったものが、前述の通り比較的近年の耕地造成に伴って階段状にカットされていた。弥生時代遺構面のベースとなる黄灰色粘質土中には、磨消縄文をもつ若干量の縄文土器の出土を見た。この黄灰色粘質土は層厚0.3~0.8m程を測り、更に下位には黒褐色粘質土が0.3m程見られた後、花崗岩の岩盤に至る。

また、事業地の範囲と水路等の制約から調査区をⅠ・Ⅱ区に分割し調査を行った。

b. 弥生時代後期の遺構

散発的ながら、Ⅰ区を中心として弥生時代の遺構を確認している。Ⅰ区北半部では弥生後期後半の竪穴住居2棟・大型掘立柱建物1棟・井戸2基・溝3を検出し、南半部では円形周溝1条・土坑1基等を確認した。Ⅰ区中央部が西へ向かって張り出すような尾根筋に相当し、北端部と南端部は緩やかに落ち込む。竪穴住居や大型掘立柱建物は、前者の最も安定したⅠ区中央の尾根筋に立地している。

竪穴住居1

Ⅰ区北半部で検出した直径6.5mの円形の竪穴住居である。検出面から床面まで0.2~0.4m程の深さを測る。東半部にベット状遺構をもち壁溝は一部途切れる。支柱穴は5基確認したが、壁溝とともに一部に重複する部分があることなどから、最低1回程度の立て替えを想定する。中央炉は2基検出し、切り合い関係をもつことも先の立て替えを補強するものと思われる。また、平面的には「I〇」型を呈するが、以上の理由によりこれに類するものではない。埋土中や床面には、多くの炭化材や焦土塊が認められた。この焦土塊には、スサと思われる混和材の痕跡が確認できることや、その分布状態から住居の壁土と思われる。

遺物は、覆土中より出土することが多く床面直上には殆ど見られないことから、住居放棄時に火を放ったものと思われる。また、出土遺物は弥生後期後半に比定される土器を中心に出土し、その殆どが破片の状態であった。



写真7 Ⅱ区北壁断面



写真8 Ⅰ区 全景 北から

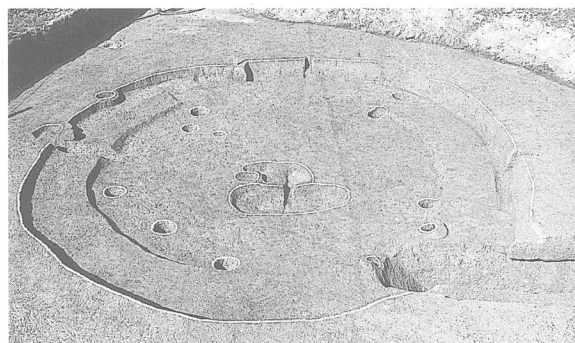


写真9 竪穴住居1 検出状況 南から

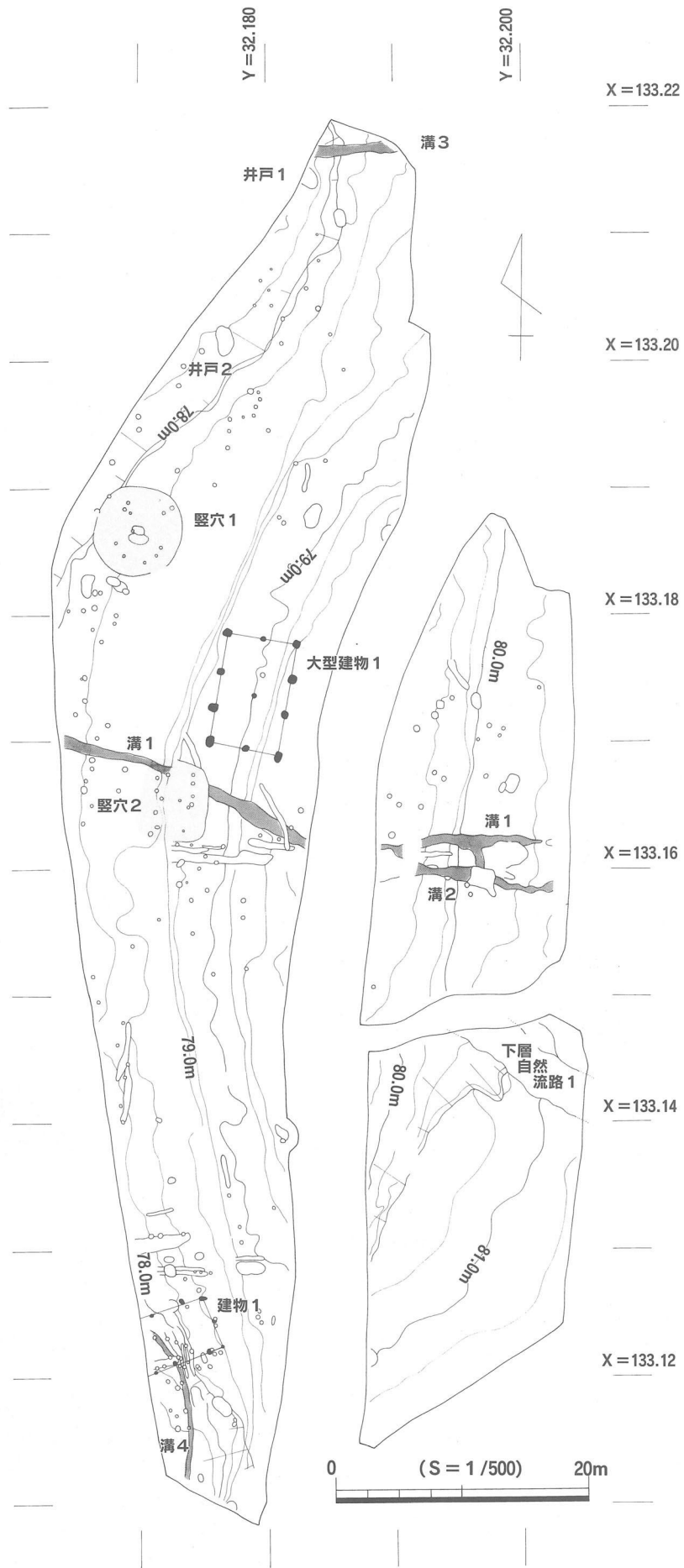


図 7 遺構配置略図

大型掘立柱建物

I区中央で検出した2間×3間(5.5×9.1)の柱構造をもつほぼ南北主軸の掘立柱建物である。また、床面中央において屋内棟持柱と思われる柱穴を確認した。床面積は50㎡を測り、県内の既往の弥生時代の掘立柱建物の中では最大である。

柱穴の平面形は、50×0.6m程の隅丸方形を基調とするが、一定したものではない。南西と南東隅の2穴のみ0.5×0.8mの隅丸長方形を呈しやや大型である。柱穴の深度は、後世の削平行為によってバラツキが認められるが、残存状態が良好なもので0.3~0.4mを測る。構築面は梁間方向で東から西へ傾斜し、柱穴底面の比高差は0.4m程を測ることから、構築以前にはほとんど地山成形を加えていないものと思われる。柱間の間隔は、梁間方向で2.6m前後と一定であることに対して、桁行では2.6~3.2mと一定ではない。既往の県内の弥生時代掘立柱建物を見ると、柱間が2m前後のものが多く、この柱間間隔は長いものと言えよう。柱痕は0.2m程の径で確認され、埋没土の状況から隅柱の4穴は、抜き取りの痕跡が見られた。また、先の地山成形を加えていないことを考慮すると土間敷きであったとは想定しづらく、何らかの床構造をもっていた可能性が高い。

出土遺物はいずれも細片の形で出土するため、時期決定に困難を伴うが、P5より出土した甕底部片の特徴より、弥生後期後半の時期を想定しておきたい。

竪穴住居との位置関係は、出土土器より竪穴住居1とは同時併存するものと思われる。竪穴住居2は時期決定に耐えうる遺物が少ないことから決定的ではない。また、間隔がやや近すぎることから、同時併存とするには問題があり、現時点では時間差をもつ可能性を考慮しておきたい。



写真10 大型掘立柱建物1 検出状況 西から

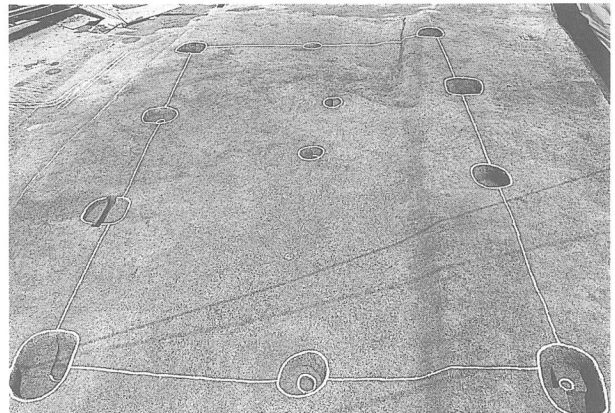


写真11 大型掘立柱建物1 検出状況 西から



写真12 大型掘立柱建物と竪穴住居2 南から

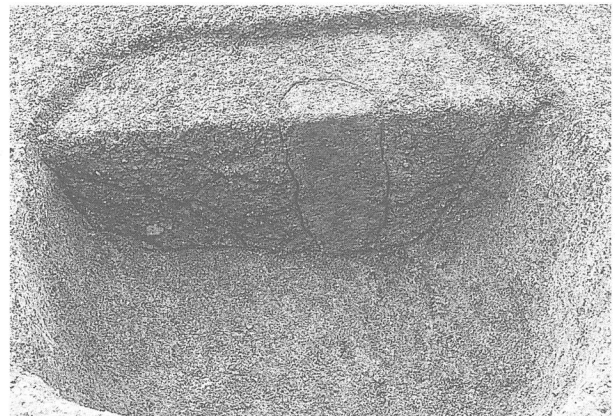


写真13 柱穴6 断面 東から

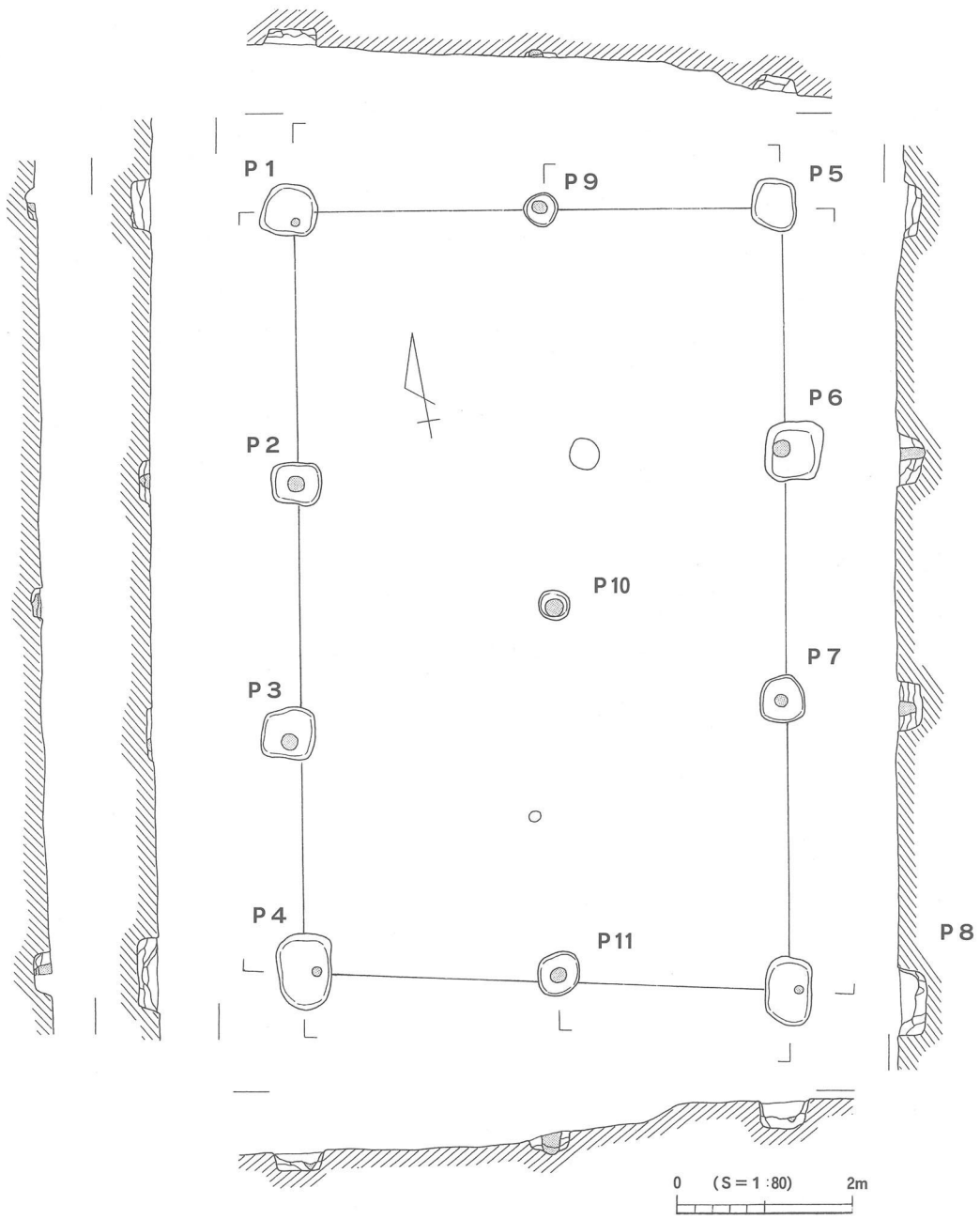


图8 大型掘立柱建物1 平·断面

(3) まとめ

I区で検出した大型掘立柱建物1は、床面積が50m²を測るものである。この「大型」と称した理由は次の点にある。既往の調査例を見ると、本地方における弥生時代の掘立柱建物床面積が30m²を越えるものは少数であることから「大型」という名称を冠した。

さて、本遺跡周辺における既往の調査例を見てみると、棟持柱を掘立柱建物は少ない。諸例を挙げると、善通寺市所在西碑殿遺跡S B22（中期後半）例・同市弘田川西岸遺跡S B06（中期後半）の2例しかない。他は、平地式住居の可能性が考えられる小型のものを除けばその殆どが次のようなものである。柱穴の平面形が隅丸方形を呈し、梁間が1間である。また、梁間の間隔は3m前後のものが多く桁方向の柱間数の増減によって床面積を確保する規則性をもつ。この中で本遺跡例の大型掘立柱建物は特異な存在と言える。また、同地域では本遺跡例の帰属時期である弥生後期後半以降掘立柱建物そのものの検出例が無いこともあり、地域内での位置づけが難しい。やや地域を広げて見てみると、高松平野以東の地域では、後期前半以降に大川町寺田産宮遺跡S B04（後期前半）例、三木町鹿伏中所遺跡S B04（後期後半）例など棟持柱をもつものが散見される。これらを考慮し、ここでは本遺跡例の出現を高松平野以東地域からの影響を想定しておきたい。今後、搬入土器などの状況や竪穴住居や集落構成などを含めて、この大型掘立柱建物の出現の経緯について検討していきたい。

今回は、周辺に存在する竪穴住居との位置関係や、床張であると思われることから集落内の共同倉庫として建物機能を推定した。しかし、柱構造以外に先に見たように後期前半以前のものに比べて面積的に大型化している点も注意される。この点については、本遺跡だけではなく同平野の中での集落の動態や構造の変化を考慮した上で検討していく必要があると考えられる。

3. 室塚遺跡

(1) 遺跡の位置 (図9)

室塚遺跡は、綾歌郡綾歌町大字岡田上に所在する綾歌町と満濃町の境にある西山の東麓にあたる。調査地は、2カ所にわかれ、A区は西山から南に派生した尾根の稜線上に位置し、東側の眺望に優れる。B区は、A区の北東で丘陵に囲まれた緩斜面の谷部分に当たる。

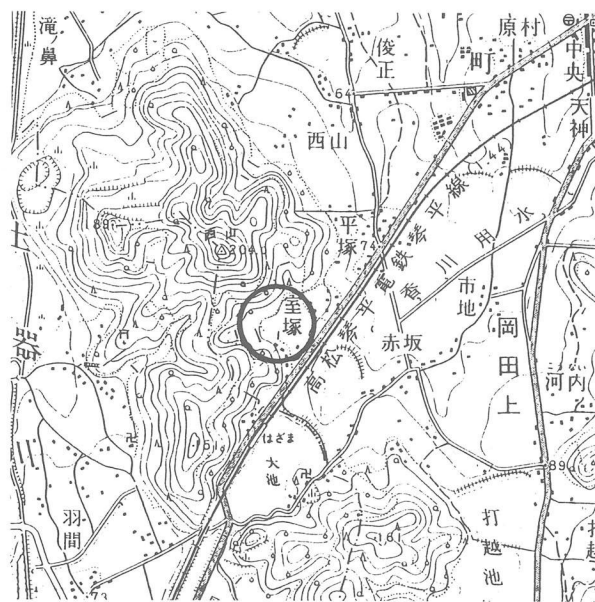


図9 遺跡の位置 (1/25,000)

(2) A区の遺構 (図12) ・遺物

A区は、現状で山林及び果樹園であり、木の根の攪乱や現代の攪乱が多数検出した。検出した遺構は弥生後期と考えられる木棺墓7基を含む10基の墓群と、古墳終末期の周溝及び横穴式石室をもつ古墳である。木棺墓としたものはいずれも、墓坑底の短辺側に溝状の掘り込みがあるもので、一部の木棺墓には棺内と棺外の区別を示すと考えられる埋土の差が観察された。墓群は、西山から派生した尾根の頂部に位置し稜線に直交あるいは平行する群と、尾根頂部からやや下った支尾根状の稜線に直交する群に大きくわかれる。また、木棺墓S T01の周りには、S T01の主軸方向と平行及び直交する溝があり、木棺墓の周溝の可能性もある。弥生時代の墓坑埋土からは遺物は出土していない。昨年度実施した予備調査時に出土した完形に近い弥生後期の土器 (図11) の出土位置が木棺墓の直上に復元されることから、これらの墓群は弥生後期のものと考えられる。

古墳は、「コ」の字状の平面形をなす周溝を持つ。盛土は一部で厚さ40cm程度残存していた。横穴式石室は、径20cm前後の扁平な円礫の礫床が長さ4.2m、幅1.3m程度残存していた。礫床下には、長軸に沿う素掘りの排水溝があった。礫床より南側に残存していた3石の円礫は、羨道の基底石の可能性があろう。石室の攪乱坑から礫床の円礫より大きめの円礫が少数出土していることから、壁石も円礫を使用していたと考えられる。

遺物は、木棺墓の直上から出土した弥生後期の土器のほかに、弥生中期の土器及び石鏃10数点が遺構とは関連せず出土した。また、横穴式石室床面からは、須恵器少量及び鉄釘が出土した。

(3) B区の遺構・遺物

B区は、現況で緩傾斜地に作られた棚田状水田であった。調査区内の現況の地形は小さい谷状をなし、遺構も弥生中期後半以降に埋没を開始した川跡を検出した。調査区が狭かったため、川幅が判明したのは一部で、約4m以上の幅をもつ。一部に川をせき止めたような石列が観察され、検出層位から中世以降の時期が考えられる。遺物は、検出した川跡の最下流で弥生中期後半～後期初頭の土器がややまとまって出土した。第 図2は予備調査時に出土した。また、川跡埋土中位からは、中世前半期の土器が出土している。調査区外西側では、予備調査の結果、集落跡と考えられる遺構は検出していない。調査区内の一部で、川跡の東側に黄色粘土層の基盤層を耕作土直下で確認し、また調査区外の東側はかなりの比高差をもって高くなっていることから、集落跡が存在する可能性はあろう。



図10 調査区位置 (1/2,000)

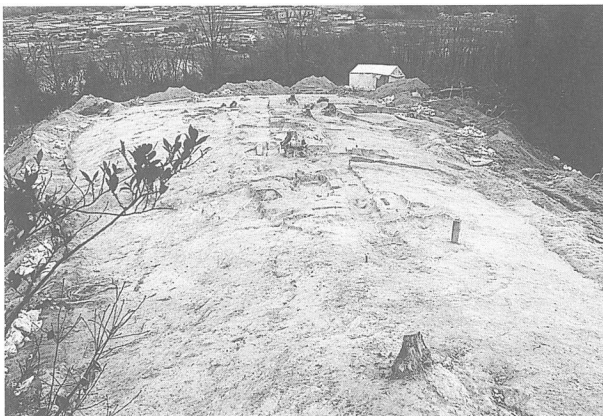


写真14 A区全景 西から



写真15 横穴式石室 全景 南から

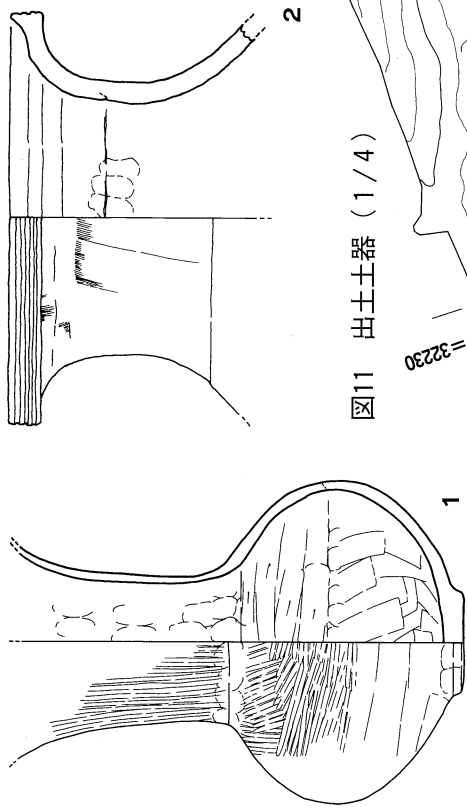


图11 出土土器 (1/4)

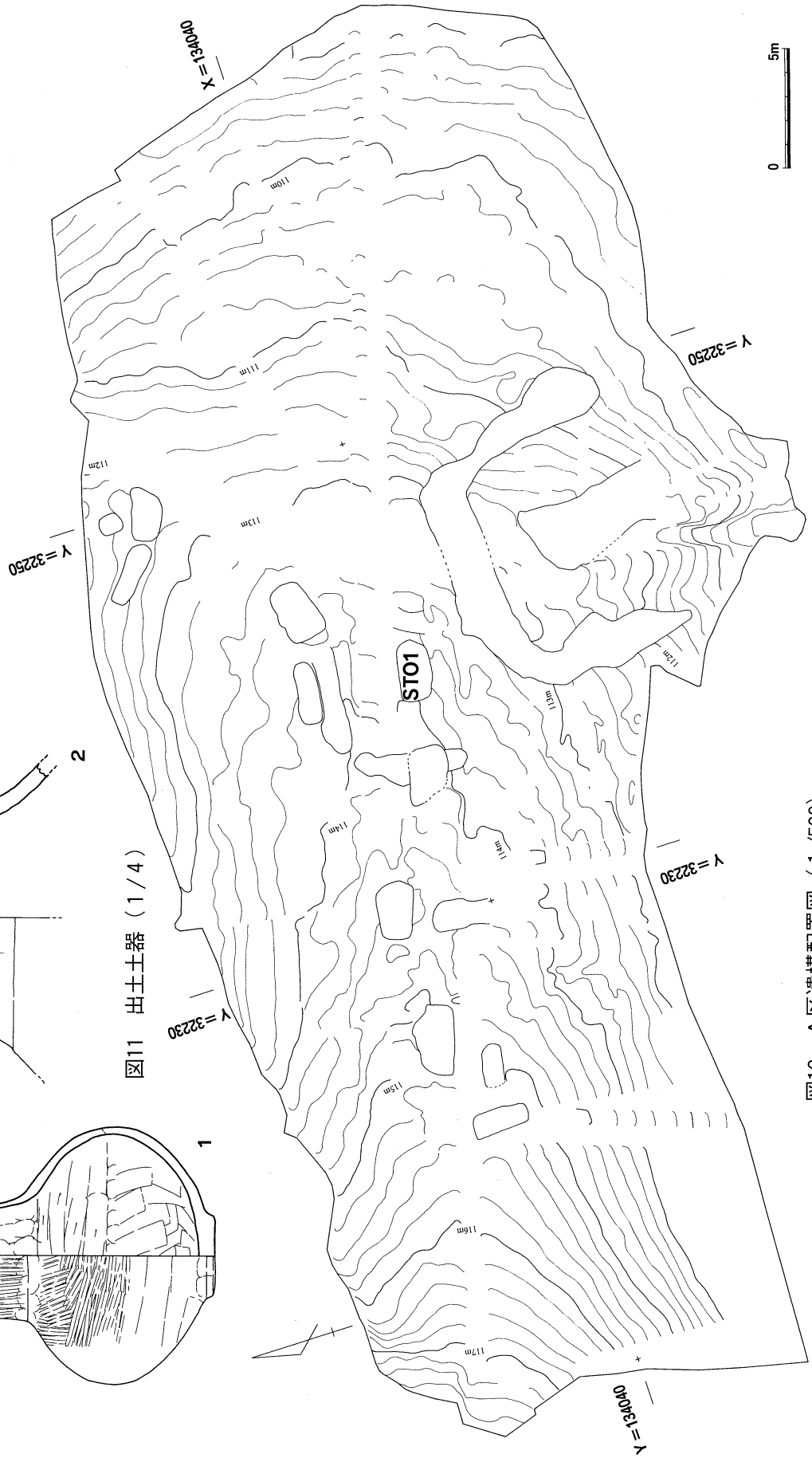


图12 A区遺構配置図 (1/500)

Ⅲ．整理事業の概要報告

鴨部・川田遺跡

(1) 本年度整理事業の概要

本年度は平成3年度調査を実施した鴨部・川田遺跡の整理事業の3年目に当たる。本年度は本遺跡出土の石製品と弥生時代の環濠出土土器の整理を行い、『鴨部・川田遺跡Ⅲ』として報告書の編集を行った。本遺跡出土の石製品はコンテナ140箱、環濠出土土器は600箱を数える。

(2) 環濠出土土器について

本遺跡からは環濠に囲まれた弥生時代の前期を中心とする集落が検出されている。本年度は環濠出土の土器を整理した。環濠からはぎっしりと詰まった状態で遺物が出土した。これらの土器は弥生時代前期後半の土器が大半を占めるが、削出突帯や段をもつ壺、段やへら描沈線文1条を施す甕等の前期中葉の土器や、櫛描直線文・波状文をもつ壺・甕等の中期初頭の土器も少量含まれることが確認されたことから、環濠は弥生時代前期中葉から中期初頭まで営まれたと考えられる。また、環濠からは土偶の頭部が出土している。土偶は中実の土製品でかなり写實的に表現されており、頭頂部には鱗状の隆帯がみられる。目と口は削り貫きによって表現されており、目の下と口の両側には入れ墨の表現と思われる弧状の沈線が2本ずつみられる。

(3) 石製品について

本遺跡からは各種の石材を用いた弥生時代の石器や平安時代の五輪塔が出土した。弥生時代の石器の石材にはサヌカイトや流紋岩・安山岩・半深成岩・結晶片岩・花崗岩・砂岩等が用いられている。サヌカイト製石器は打製石庖丁・石鎌・スクレイパー・石匙・石錐・石鏃等の製品が900点前後、剥片・石核等が17,000点弱、サヌカイト製以外の石器は打製石庖丁・磨製石庖丁・石庖丁未製品・石鍬・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・環状石斧・石錘・紡錘車が700点弱、叩き石・砥石・石皿・磨石等が600点強、素材・剥片が300点前後みられる。この中でも注目されるのは流紋岩製の石庖丁である。流紋岩製石庖丁には未製品も多数出土しており、粗割段階・整形剥離段階・研磨段階の各工程の資料がそろっており、石庖丁の製作工程がうかがわれる良好な資料である。

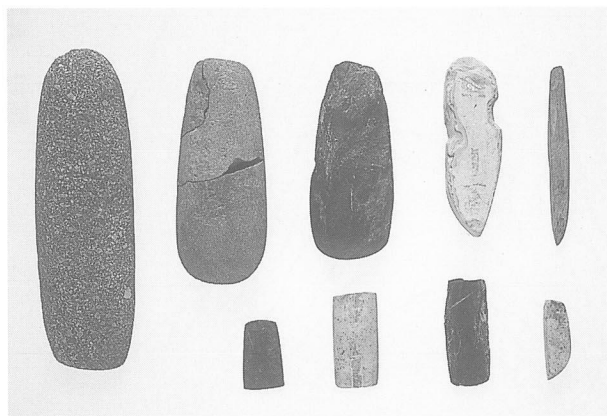


写真16 鴨部・川田遺跡出土石斧

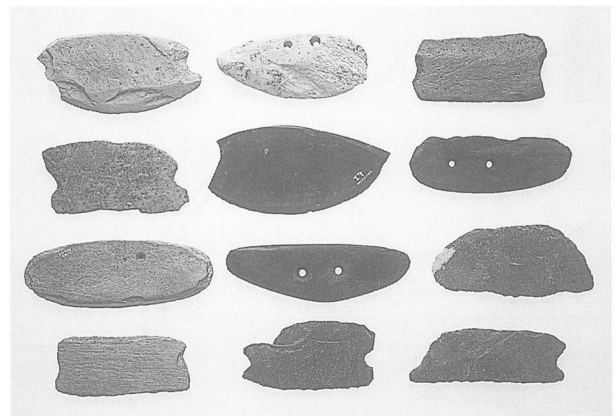


写真17 鴨部・川田遺跡出土石庖丁

報告書抄録

ふりがな	こくどうバイパスけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
巻次	平成12年度							
編著者名	藤好史郎・森下友子・山下平重・信里芳紀							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 国土交通省四国地方整備局							
発行年月日	2001年3月31日							
総稿数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数		
19	3	16			12	17		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査 期間	調査 面積	調査原因
		市町	遺跡					
すみよし 住吉遺跡	香川県綾歌郡 綾歌町若狭	37384		34° 14' 10"	133° 53' 10"	2000.04 01 2000.04 30	631m ²	国道32号綾歌 バイパス
はざま 羽間遺跡	香川県仲多度郡 満濃町羽間	37402		34° 10' 25"	133° 51' 00"	2000.05 01 2000.09 30	3,750m ²	国道32号綾歌 バイパス
むろづか 室塚遺跡	香川県綾歌郡 綾歌町室塚	37384		34° 10' 20"	133° 51' 10"	2000.11 01 2001.01 31	2,056m ²	国道32号綾歌 バイパス
かべかわた 鴨部・川田遺跡	香川県大川郡 志度町鴨部	37306		34° 17' 45"	134° 13' 15"	-	-	高松東道路
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
住吉遺跡	集落	中世	掘立柱建物他	土師質土器				
羽間遺跡	集落	弥生時代後期 中世	掘立柱建物・ 竪穴住居他	弥生土器 瓦器・土師質土器		大型掘立柱 建物		
室塚遺跡	集落・墓 古墳	弥生時代後期 古墳時代終末期	土壌墓群・ 終末期古墳	弥生土器 須恵器・土師質土器		土壌墓群		
鴨部・川田遺跡	集落	弥生時代前期	環濠・平地式 建物	弥生土器・磨製石器類・ サヌカイト製石器他		環濠集落		

国道バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成12年度

平成13年3月31日

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
発行 香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
国土交通省 四国地方整備局
印刷 株式会社中央印刷所